

れぞれ 1 個宛別々の陰囊に包まれ、しかもその陰囊は左右の内肢の基部に緊密に固着していた。正常位置に存在する肛門に續いて小さな三角形の凹所を有し、その下部に下側を向いて尿道が開口している。そしてその真下から引續いて細長い溝が、徐々に幅をせばめながら正中線に沿うて會陰部を通つて陰囊を二分し、陰莖基部にまで及んでいる。肛門や尿道の開口部、及びそれに續く裂溝の附近は被毛を全く缺除していた。尿の排泄は雌性器官より行い、排尿時の姿勢も正常雌と變らない。以上の觀察は外部的觀察のみであるが、雄性生殖器官の發達に較べて雌性器官の發達は極めて貧弱であることからみて、この異常個體は雄性間性であるように考えられる。

ネズミ子宮に對するパラフィン注入の影響 南部 實 (東京齒大・豫・生)

未産鼠への子宮パラフィン注入は注入後 2~3 週間發情がなくなり偽妊娠様となるといわれる (Selye '34)。發情各期に注入すれば多くは 1 週間以内に發情し、3 週間内に 3~4 回の發情が見られる。この際發情期間が 2~5 日連續するものが多い。又發情前期、同後期に注入した場合は發情が不規則となる。卵巢を脾内に移植して注入してみた結果、移植後 100 日間全く發情をみなかつたものが、注入後 1 週間内に發情し其後不規則に 2~3 回發情した。發情しなかつた 1 例もある。移植と注入を同時に行つた場合は 1 週間目第 1 回、4~5 日において 4~5 日連續發情、更に 3~4 日で第 3 回發情をみせる。發情各期注入の場合卵巢は大體正常脾内移植の際には卵巢が殆ど黄體の塊となり正常濾胞は見られない。全例を通じて乳腺發育及び腦下垂體に於ける去勢細胞發現は見られない。脾内卵巢移植群の發情機構は不明であるが、移植卵巢の癒着、卵巢殘片の存在はなく、注入パラフィンの不純による發情も考えられない。

(問) 脾臓内に卵巢をうえてからパラフィン注射にいたるまで毎日 smear を見られましたか。(竹脇潔)

(答) パラフィン注入を脾内移植後 100 日に行つたものは毎日見てあります。注入と移植同時施行のものはその 2 週間前から見ました。

脾臓内移植卵巢に對する雄性物質および發情物質の影響 竹脇潔・前川久太郎 (東大・理・動)

生殖腺を除去されたネズミの脾臓内に卵巢を植え、30 日後より testosterone propionate または estrone の注射を 40 日間繼續した場合、前者は注射 1 日量 $1/32$ mg 以下で、後者は $1/128$ mg 以下では、腦下垂體前葉の生殖腺刺激ホルモン放出に大きな影響を及ぼし得ず、特に前者は殆ど無効であることは、移植卵巢の構造が無注射の場合と同様なことでわかる。しかるに注射を移植 5 日後からはじめるならば test. prop. の 1 日量 $1/32$ mg は明らかに有効で、移植卵巢において黄體組織の減少、濾胞の出現成長をひきおこす。1 日量 $1/256$ mg でも幾分有効である。estrone は $1/128$ mg で黄體組織の消失、濾胞の成長をおこし、 $1/512$ mg, $1/2048$ mg でも同方向の變化を生ずる。30 日間生殖腺のホルモン作用から解放されていると、腦下垂體前葉の生殖腺刺激ホルモン産出にかなり深刻な變化を生ずることがわかる。

(問) 副腎機能の相關について考慮する必要はないか。(朝山新一)

(答) 大したことはなかりうと思つています。DOCA を注射しても成體では殆ど無効です。出生當日から種々の期間注射したものでは恒久的に腦下垂體機能が變化することは見ております。

サザエ貝殻の成長と攝取海藻の種類との關係 猪野 俊 (東海區水研)

サザエ (*Turbo cornutus* Solander) に褐藻類の一種アラメ (*Eisenia bicyclis*) を投與した場合、爾後に生成される貝殻の色彩が白色となることは既に著者が報じた所であるが、本研究では更にテングサ (*Gelidium amansii*) 及びホンダワラ (*Sargassum*) を與えた場合の貝殻の色彩及び成長度の相異について述べた。

テングサを與えると貝殻の新生成部の色彩は緑黒色と成り、ホンダワラではアラメと同じ傾向であるが稍淡褐色の部分が多くなる。成長度はアラメが最も良く 1 年間の飼育で増重率 134%、テングサは之れに次い